愛知淑徳大学文化創造学部における英語教育 －TOEIC®導入によるカリキュラム考察－*

中郷　慶，大野清幸

English Education at the Faculty of Creativity and Culture, Aichi Shukutoku University: using the TOEIC score as a scale

Kay Nakago and Seiko Ono

0. はじめに

愛知淑徳大学文化創造学部は，愛淑徳短期大学を改組して2000年４月に開設された学部である[1]。開設に当たり，文化創造学部では，TOEICスコアに基づいた英語到達度別クラスによるカリキュラムを導入した。このシステムは，全国的にも注目に値するものである。この論文の目的は，文化創造学部の英語カリキュラムの思想を論じ，新学部１年目の成果を評価・検討し，TOEICスコアを指標とした英語教育の改善を探ることである。さらに，学生の英語学習の動機・学習時間・学習履歴などが英語コミュニケーション能力（の進捗）にどのような影響を与えているかも議論する。

この論文の構成は，次の通りである。１節では，文化創造学部の英語カリキュラムとTOEICスコアを利用した到達度別クラス編成および運用の全体像を概観する。２節では，我々の研究の目的と方法を説明する。３節はその調査結果と，それに基づく考察である。４節はまとめである。

1. 文化創造学部における英語カリキュラム

1.1　英語カリキュラムの概要

文化創造学部は「停滞しがちな現代の文化状況を，創造的な視点に基づき文化創造に積極的に取り組むことのできる人材を育成することにより，日本社会の新たな活性化に貢献していこうとする学部」[2]である。表現文化専攻，多元文化専攻，環境文化専攻の３専攻はそれぞれ，「独創的な表現能力の育成」「多元的な文化の主体的な受容と理解」「生活文化としての環境の理解とその改善」を基本的な教育目標としている。いずれも，現代日本の文化状況の実態に対応しつつ，各専攻の領域における創造的な表現・企画・立案・提言に必要とされる多様で実践的な知識と技能を育成するために，カリキュラムが編成されている。

* 本研究は，2000年度愛知淑徳大学共同研究助成による研究である。

「文化創造」という理念は，「多面的な場に臨機応変に適合していく実践的な知識と技能を持った人材」によって初めて実現される。とりわけ，実践的な技能・技能的な側面は，知識の応用という意味でも重要な働きをする。この観点から，文化創造学部では，「文化創造」の理念を実践的に支える「表現技術科目」として，「日本語技術」「外国語技術」「コンピュータ技術」に関する科目を1年次から4年次にわたって開講している。この論文に関するのは，このうち「外国語技術科目」である。

外国語技術科目が対象とする外国語は，21世紀の日本がより緊密な関係を築くと考えられるアジア太平洋地域の言語のうち，英語・韓国語（朝鮮語）・中国語・ロシア語の4か国語である。これらの4か国語のうち，文化創造学部では，国際的な共同性の高い英語を中心に置き，実際的な場面に生かしうる運用能力・表現技術の習得を目指している。外国語技術科目のうち，英語科目の学年配当を示したのが，次の表である[3]。

表1　文化創造学部における「表現技術科目外国語技術科目」の英語科目一覧

科目	単位		履修年次・開講期間							
	必修	選択	1年		2年		3年		4年	
			前	後	前	後	前	後	前	後
英文多読・速読	2			○						
リスニングⅠ	2		○							
リスニングⅡ	2	2		○						
英会話Ⅰ	2				○					
英会話Ⅱ	2					○				
ライティングⅠ		2	○							
ライティングⅡ		2		○						
英語発音トレーニング		2						○		
TOEICトレーニングⅠ	2		○							
TOEICトレーニングⅡ		2			○					
TOEICトレーニングⅢ		2				○				
時事英語	2	2					○	○		
上級英会話		2							○	
上級ライティング		2							○	

文化創造学部では，1年次に「英文多読・速読」「リスニングⅠ」「TOEICトレーニングⅠ」を，2年次に「英会話Ⅰ」「英会話Ⅱ」を全ての専攻に必修として基礎的な力を養成し，以後の展開は学生の関心と主体的な選択にゆだねている。基本的な英語表現技術習得の指標としてTOEICスコアを利用し，より高い水準を目指しうる科目を段階的に開設してある。また，英語に対する関心と能力のある学生のために，「上級英会話」「上級ライティング」の2科目を開設して，高度の語学力の習得を目指す特別演習クラスを置いている。

1.2　文化創造学部の英語カリキュラムの特徴

文化創造学部の英語カリキュラムの特徴の一つは，リスニング能力の育成を重視している

ということである。学生たちは，大学入学時までに，ほとんどリスニング面のトレーニングを受けていないという印象がある[4]。学生の関心の中心は英会話にあるのだが，聞き取りもできないのに，英会話が成立しないのは自明である[5]。また，竹蓋(1984, 1999)などでも論証されているように，4技能のうちリスニング力を最優先して伸ばせば，他の能力の向上への波及効果は高いが，その逆は成り立たない。これらの先行研究に基づき，文化創造学部では，「リスニングⅠ」「リスニングⅡ」を1年次に配当し，その成果が2年次に配当された「英会話Ⅰ」「英会話Ⅱ」などのクラスに生かされるようになっている。この取り組みの成果については，3節を参照のこと。

このような目的と理念を持って，文化創造学部の英語カリキュラムを設計したものの，従来のクラス編成では問題が生じることが容易に予想された。

大学生の学力低下が指摘されて久しい。また，近年は多くの大学が，学生確保のためにさまざまな方式の入学試験を行っている。愛知淑徳大学も例外ではなく，受験科目数の違いによるA方式，B方式，C方式の3方式によって5回行われる一般入試のほか，AO入試，指定校入試，公募制入試などのいわゆる学力試験によらない入試も行われている[6]。文化創造学部では，外国語（英語Ⅰ，英語Ⅱ）の受験が，どの入試形態においても必須とはなっていない。このことは，英語の習熟度の低い学生が入学してくる可能性があることも意味する。このような学生を，従来通り，ただ単に学籍番号などによって機械的にクラス分けをして，英語受講のクラスを決定していては，問題となるのは当然のことである。そこで，文化創造学部では，学生と教師の両者にとって，より効果的・効率的な授業運営ができるように，英語の授業を受講するための，習熟度・到達度別クラスの導入を決めたのである[7]。ここで問題になるのが，どのようにして到達度別クラスを編成するかということである。いくつかの大学に対して筆者がヒアリングを行ってみたところ，学生による自己申告によって英語受講クラスを編成している大学もあった。しかし，このような主観による方法では，到達度を正確に反映したクラスを編成することは不可能であり，学生は，単位が取りやすいと考え，自分の能力よりも低いレベルのクラスを申告する傾向があるという。

学生の英語能力を正確に把握し，到達度別クラスを編成するために，われわれが導入したのが，TOEICである[8]。文化創造学部におけるTOEICの活用については次節で論ずることにする。

1.3　文化創造学部におけるTOEICの活用

2000年度のTOEICの受験者数は，100万人を突破した。人事ファイルへの登録や国際要員選抜のための基準設定，研修の効果測定，内定時や入社時のレベルチェックに利用している企業も多い。TOEICは，年間6回一般公開テストが実施されている。このほかに，企業・学校・団体などの要請に応じて，随時TOEICを受験できる団体特別受験制度（IP: Institutional Program）がある。文化創造学部で採用したのは，このIPテストである。IPテストは，公開

テストと全く同じ評価基準で行われ，スコアの有用性も公開テストと同等とされる[9]。

文化創造学部では，新入生全員に対して，4月の入学式の2日前にTOEIC IPテストを実施する[10]。スコアシートは直ちに，東京のTOEIC運営委員会の業務センターに送られる。ラピッドスコアリングサービスを利用すると，その3日後には，スコアが磁気媒体に記録されて返却される[11]。この結果をもとに，直ちに英語到達度別クラスの編成作業に取りかかり，学生に対して掲示により発表する。学生はこの発表に基づき，前期の時間割作成・履修登録に取りかかることになる。学生の所属クラスは，1年間同じである。

翌年2月になると，1年生は，再度，TOEIC IPテストを実施する。これは，2年生の到達度別クラスを決めるためのものである。

到達度別クラスは，上級・中級・初級の3段階に分けられているが，どのクラスが上級なのかは学生には公表していない[12]。教員には，どの到達度別クラスを担当するかは通知するが，あくまでも，文化創造学部では，TOEICは到達度別クラス編成のためだけに採用していることということで，個々の学生のスコアについては一切公表していない。これは，スコアに基づく成績評価を避けるためである。ただし，各専攻・到達度別クラス毎のTOEIC IPテスト予測平均スコアは示してある（論文の最後に示した表v参照）。

2. 調査の内容

この研究の目的は，文化創造学部における英語教育1年目の成果を評価・検討し，今後の英語教育に役立てることである。われわれは(1)のような仮説を立て，それを立証するために，(2)の調査を行った。

(1)　a. 英語コミュニケーション能力は英語学習時間に依存する。
　　b. 英語が好きだという学習者は，高い英語コミュニケーション能力を示す。
　　c. 中学校・高等学校で好きな英語教師がいたことが，英語コミュニケーション能力に影響を与える。
　　d. 明確な進路目標を持っている，特に将来英語を使った職に就きたいと考えている学生は，高い英語コミュニケーション能力を示す。
　　e. 日本語の読書習慣のある学生は，高い英語コミュニケーション能力を示す。
　　f. 海外生活体験のある学生は，高い英語コミュニケーション能力を示す。
　　g. 英語学力試験の中には，受験者の英語力を正確に測定できないものもある。

(2)　a. 学生の英語学習履歴と英語コミュニケーション能力の相関関係を調査する。
　　b. 英語学習者の意欲が，英語コミュニケーション能力の進捗度に及ぼす影響を調査する。
　　c. 文化創造学部の導入したTOEIC IPテストが，学生に与えた影響を調査する。
　　d. さまざまな英語問題の信頼性を，TOEICスコアとの相関関係によって調査す

る。

基礎資料としたのは，以下の３つである。

(3)　a. 学生のTOEICスコア
　　b. 学生へのアンケート調査
　　c. 学生に解答させた他の英語問題の得点（率）

(3b)のアンケートは，TOEIC IPテスト受験時に，スコアシート裏面のデータシートの「属性」欄と「所属コード」欄を用いて行った。質問項目はこの論文の最後の表i-ivに示してある。

(2)で挙げた４つの調査のうち，この論文で扱うのは，(2a-c)の３つの調査である。それぞれの具体的内容は次の通りである。(2a)はアンケート調査をもとに，学生の経歴のうち，どの因子が英語コミュニケーション能力に大きな影響を与えたのかを明らかにすることである。(2b)では，学生の英語学習時間の長短や，将来の具体的進路目標の有無によって，英語コミュニケーション能力の進捗度にどのような影響を与えているかを明らかにすることである。また，(2c)では，新入生全員にTOEIC IPテストを受験させ，英語の到達度別クラス編成の参考にしている文化創造学部において，TOEIC受験が学生にどのような影響を与えているか，また，学生が自己の進捗度をどの程度認識しているのか，さらには，学生が文化創造学部の英語カリキュラムをどのように評価しているかを探るものである。(3c)のデータをもとに(2d)の相関関係を考察した結果は，次稿で明らかにする。

3. 調査結果と考察

３節では，アンケート調査結果の分析に基づき，英語学習者の履歴，学習態度などが，英語コミュニケーション能力（の進捗）にどのような具体的影響を及ぼしているかを，具体的に検証することにする。

ここで，データの母集団について説明しておこう。この論文で主に扱うのは，2000年度入学生のTOEIC IPテストのスコア並びにアンケート調査データである。2000年度の入学生は406名である。文化創造学部では，全員に受験を課しているが，何らかの事情で受験できなかった学生もいる。2000年４月の入学時のTOEIC IPテスト（以下４月IPテスト）の受験者数は404名，2001年２月時のTOEIC IPテスト（以下２月IPテスト）の受験者数は378名であった。原則的には，4月IPテストの結果のみを対象に議論をする場合は４月IPテストの全受験者を，２月IPテストの結果のみを対象に議論をする場合は２月IPテストの全受験者をデータ分析の対象にしたが，アンケート項目への回答を４月IPテストと２月IPテストのスコアの変化との関係で検討する必要がある場合などは，1)４月の２月の２回のIPテストを両方とも受験している者 かつ 2)２回のアンケートの両方に回答のあった者376名を対象としている。また，適

宜，無効回答があった場合は，調査の母集団から外してある。各種スコアの平均値などは四捨五入しているので，例えば，リスニングセクションのスコア平均値とリーディングセクションのスコア平均値の合計値が，トータルスコアの平均点とは一致しない場合がある。

なお，4月IPテストと2月IPテストの実施結果は次の通りである。

表2　文化創造学部2000年度入学生4月IPテストと2月IPテストの平均点

	4月IPテスト	2月IPテスト	スコアの伸び
トータルスコア	275.3	312.7	37.4
リスニング	152.6	187.7	35.1
リーディング	122.7	125.0	2.3
受験者数	404名	378名	

1.2節では，文化創造学部での英語カリキュラムは，まずリスニング力を養成することを重視して作られていることを述べた。われわれの取り組みが成果を挙げていることがTOEICスコアによって示される。2000年度入学生全員を対象とする4月IPテストと2月IPテストを比較すれば，多元文化専攻ではトータルスコアが55.2点アップしていたが，その内訳はリスニングセクションが41.2点，リーディングセクションが14.0点というものであった。また，表2でも示したように，文化創造学部全体でのトータルスコア37.4点アップのうち，実に35.1点までがリスニングセクションにおける伸びであったのである。

3.1　学習者の英語に対する取り組み

3.1.1　英語学習時間の問題

英語学習時間を確保している学習者の方が，学習習慣のない者よりも英語コミュニケーション能力が優れていることは容易に想像できる。では，はたしてどの程度の差が生じているのであろうか。4月IPテスト実施時における「現在の1週間の英語学習時間はどれぐらいですか」という設問に対する回答は，以下の通りである。

表3　4月IPテストにおける英語学習時間に関する設問に対する回答

英語学習時間に関する回答		全くない	1時間以内	2時間以内	3時間以内	4時間以内	5時間以内	6時間以内	7時間以内	8時間以内	8時間以上
人数		297名	70名	19名	12名	3名	2名	0名	1名	0名	0名
トータルスコア		267.9	289.7	299.2	339.6	261.7	292.5	－	255	－	－
内訳	リスニング	148.0	161.8	166.6	196.3	145.0	155.0	－	95	－	－
	リーディング	119.9	127.9	132.6	143.3	116.7	137.5	－	160	－	－
トータルスコアの比較(1)		267.9 (297名)	295.9 (107名)								
トータルスコアの比較(2)		272.1 (367名)	307.7 (37名)								

表3から，英語の学習習慣がある者の方が，高い能力を持っていることが証明される。学習習慣の全くない学生とある学生の差は28.0点，毎週1時間より多い学習習慣のある学生は，1時間以内の学生に比べて35.6点高いスコアを記録している。また，入学時の学習習慣の有無は，その後のスコアの伸びにも影響を及ぼしていることがわかった。4月IPテストと2月IPテストの伸びを比較したものが次の表である。

表4　4月IPテスト実施時における英語学習時間とTOEIC IPテストの伸び

英語学習時間に関する回答		全くない	1時間以内	2時間以内	……	8時間以上
トータルスコアの伸び		31.8 (257名)	46.4 (101名)			
内訳	リスニング	33.4	36.4			
	リーディング	-1.6	10.0			
トータルスコアの伸び		33.0 (342名)			63.2 (34名)	
内訳	リスニング	33.6			41.0	
	リーディング	-0.6			22.2	

また，4月IPテスト実施時と同じ傾向が，2月IPテスト実施時のデータでも確認できる。

表5　2月IPテストにおける英語学習時間に関する設問に対する回答

英語学習時間に関する回答		全くない	1時間以内	2時間以内	3時間以内	4時間以内	5時間以内	6時間以内	7時間以内	8時間以内	8時間以上
人数		179名	111名	55名	23名	8名	0名	0名	0名	0名	0名
トータルスコア		289.2	318.6	326.0	383.0	486.3	−	−	−	−	−
内訳	リスニング	176.9	186.9	196.5	222.0	284.4	−	−	−	−	−
	リーディング	112.3	131.7	129.5	161.0	201.9	−	−	−	−	−
トータルスコアの比較(1)		289.2 (179名)	335.0 (197名)								
トータルスコアの比較(2)		300.5 (290名)		356.2 (86名)							

4月IPテストに比べて，学習習慣の全くない学生とある学生の差はさらに大きくなり45.8点（4月IPテスト時は28.0点），毎週1時間より多い学習習慣のある学生は，1時間以内の学生に比べて55.7点（4月IPテスト時は35.6点）高いスコアとなっている。

規則的な英語学習時間を確保することによって，高いスコアの伸びが期待できることが明らかになった。すなわち，(1a)の仮定は立証されたことになる。4月IPテスト実施時は，全体の74%の学生が「英語学習時間が全くない」と回答していたのに対して，2月IPテスト実施時は26ポイント下がったが，それでもなお全体の48%の学生が「英語学習時間が全くない」と

回答しており，今後，英語学習を定着させていくことが，学生の英語力の増強のための課題であると言える。そのためには，英語教師が授業で課題を定期的に学生に与えることが重要である。

3.1.2　英語に対する態度が英語コミュニケーション能力に及ぼす影響について

「英語が好きですか」という質問に対する回答と，4月IPテストと2月IPテストのスコアの伸びをまとめたのが，次の表である。

表6　英語が好きかどうかとトータルスコアならびにスコアの伸びの比較

「英語が好きですか」に対する回答		好き		どちらでもない		嫌い	
人数		135名		156名		85名	
4月IPテストスコア（トータル）	リスニング	307.3	170.4	269.4	145.7	243.6	140.6
	リーディング		137.0		123.7		103.0
2月IPテストスコア（トータル）	リスニング	350.6	206.0	306.0	181.5	265.8	169.9
	リーディング		114.6		124.5		95.9
スコアの伸び		43.3		36.6		22.8	

予想される通り，英語を「好き」と回答する学生の方が，トータルスコアが高くスコアの伸びも大きかった。

また，英語が好きになるかどうかは，中学校・高等学校時代に好きな英語教師がいたかどうかにもよると考えられる。そこで，まず，好きな英語教師がいたかどうかを聞いた結果が表7である。

表7　好きな英語教師がいたかどうかとトータルスコアとの関係

「中学・高校時代に好きな英語の先生がいましたか」に対する回答		いた		いなかった	
人数		232名		170名	
4月IPテストスコア（トータル）	リスニング	282.3	155.3	226.8	149.3
	リーディング		127.0		117.5

ここでも，予想通り，好きな英語教師がいたと回答した学生の平均スコアの方が，いなかったと回答した学生よりも高かったが，その差は55.5点にも上った。好きな英語教師に出会うことが，英語の能力にも大きな影響を及ぼすことが示される。さらに，好きな英語教師に出会ったことと，英語が好きであるかどうかの関係とそれぞれのスコアを示したのが，表8である。やはり，好きな英語教師がいて，なおかつ，英語が好きだと答えている学生の平均値が一番高く，ただ単に英語が好きだと回答している学生の平均値（307.3点）よりもわずかながら上回っている。

表8　好きな英語教師がいたかどうかと英語が好きかどうかの関係

		「英語が好きですか」に対する回答	人数	4月IPテストスコア（トータル）	リスニング リーディング
「中学・高校時代に好きな英語の先生がいた」と回答した学生数	232名	好き	106名	308.3	170.7 137.6
		どちらでもない	97名	267.9	144.0 124.0
		嫌い	29名	235.9	137.1 98.8
「中学・高校時代に好きな英語の先生がいなった」と回答した学生数	170名	好き	35名	300.7	170.9 129.9
		どちらでもない	73名	268.2	147.3 120.9
		嫌い	62名	246.0	139.5 106.5

この節では，英語が好きだという学習者は高い英語コミュニケーション能力を示すという(1b)の仮説が正しいことが証明された。また，(1c)の仮説に関して，中学・高等学校で好きな英語教師がいるかどうかという要因も，大きな影響を持つことが示された。「英語が好き・好きな英語教師がいた」というグループと，「英語が嫌い・好きな英語教師はいなかった」というグループのトータルスコア（平均値）の差は，62.3点にものぼる。

3.1.3　目標の意識化：卒業後の進路目標との関係

モラトリアム期の延長に伴い，将来に向けての進路目標を持って大学に進学する学生が減っている。この節では，学生の将来の進路目標と英語能力との関係について探るために，具体的な大学卒業後の進路目標がある学生とない学生との比較をする。表9は4月IPテスト時点での状況をまとめたものである。

表9　具体的進路目標があるかどうかとスコアとの関係

「具体的な大学卒業後の進路目標がありますか」に対する回答		進路目標があり，英語を使った職に就きたい		進路目標はあるが，必ずしも英語を使う職業ではない		具体的進路目標がない	
人数		71名		212名		119名	
4月IPテストスコア（トータル）	リスニング	288.2	159.4	273.7	153.3	243.6	147.2
	リーディング		128.8		120.3		123.4

具体的な進路目標を持っている学生の方が，具体的目標のない学生より30点以上も高いスコアとなっており，さらに，将来，英語を使った職に就きたいと答えている学生の方が，必ずしも英語を使う職業ではないと答えた学生よりも，14.5点高いスコアを示した。同じ質問を，2月IPテストでもした。2月IPテストでの回答実績をもとに，4月IPテストとの伸びを示した

のが，次の表である。

表10　2月IPテスト時において具体的進路目標があるかどうかとスコアとの関係，およびスコアの伸び

「具体的な大学卒業後の進路目標がありますか」に対する回答		進路目標があり，英語を使った職に就きたい		進路目標はあるが，必ずしも英語を使う職業ではない		具体的進路目標がない	
人数		40名		182名		142名	
2月IPテストスコア（トータル）	リスニング	351.1	203.9	305.5	184.3	313.3	188.3
	リーディング		147.1		121.1		125.0
		⇧		⇧		⇧	
4月IPテストスコア（トータル）	リスニング	292.0	157.7	274.2	151.1	279.7	156.6
	リーディング		134.3		123.0		123.1
スコアの伸び		59.1		31.3		33.6	

4月IPテスト実施時に比べて，具体的進路目標がないと回答した学生の全体に対する割合は，4月の29.6%から2月の39.0%へと約10ポイント増加している。2月IPテスト実施時に「進路目標があり，英語を使った職に就きたい」と答えた学生は59.1点と高い伸びを示した。さらに，高い伸びを示しているのは，4月IPテスト実施時には「具体的進路目標がない」と答えていたものの，2月IPテスト実施時に「進路目標があり，英語を使った職に就きたい」と答えていた学生である。このような学生は5名だったが，1年の間に，93点という高い値の伸びを示した。詳細は次の通りである。

表11　1年生の間に進路目標ができた学生のスコアの伸び

		4月IPテスト実施時には具体的進路目標がなかったが、2月IPテスト実施時には英語を使った職に就きたいと答えた学生	
人数		5名	
2月IPテストスコア（トータル）	リスニング	343.0	195.0
	リーディング		148.0
		⇧	
4月IPテストスコア（トータル）	リスニング	250.0	146.0
	リーディング		104.0
スコアの伸び		93.0	

表11は英語学習にとって，動機付け，特に目標の意識化と明確化がいかに重要であるかを改めて示すものである。以上，この節では(1d)の仮説が正しいことを見てきた。

3.1.4　日本語の読書時間と英語コミュニケーション能力との関係

3.1.1節では，英語学習時間と英語コミュニケーション能力との間に密接な関係があることが示された。それでは，日本語の読書時間と，英語コミュニケーション能力の間には，どの

ような関係があるのだろうか。4月IPテスト実施時に「現在の1週間の読書時間（日本語）はどれぐらいですか」に対する回答とスコアとの関係をまとめたのが，次の表である。

表12　4月IPテスト実施時における日本語の読書時間とスコアとの関係

日本語の読書時間時間に関する回答		全くない	1時間以内	2時間以内	3時間以内	4時間以内	5時間以内	6時間以内	7時間以内	8時間以内	8時間以上
人数		134名	108名	51名	43名	23名	18名	4名	6名	5名	12名
トータルスコア		277.4	277.2	287.3	255.8	258.5	260.0	276.3	325.8	315.0	268.8
内訳	リスニング	151.3	153.7	162.2	136.9	150.0	148.9	155.0	183.3	173.0	158.8
	リーディング	126.0	123.5	125.1	119.0	108.5	111.1	121.3	142.5	142.0	110.0
トータルスコアの比較(1)		277.3 (242名)	272.4 (162名)								
トータルスコアの比較(2)		279.0 (293名)	265.6 (111名)								

日本語の読書時間と英語コミュニケーション能力との間の一貫した関係は，このデータからは読みとることができない。(1e)の仮説は支持されないことになる。

3.1.5　海外生活体験と英語コミュニケーション能力との関係

観光を目的としない海外での生活体験の有無およびその期間，時期と英語コミュニケーション能力とは，どのような関係があるのであろうか。4月IPテストでのアンケート結果をまとめたのが，以下の表である。

表13　海外生活体験とスコアとの関係

海外生活体験の期間	人数	4月IPテストスコア（トータル）	リスニング	リーディング	2月IPテストスコア（トータル）	リスニング	リーディング	スコアの伸び（トータル）	リスニング	リーディング	うち英語圏での生活体験者数
ない	324名	270.6	148.6	122.0	304.7	182.7	121.9	34.1	34.1	-0.1	–
2週間	35名	303.0	172.9	130.1	355.7	211.3	144.4	52.7	38.4	14.3	32名
1か月	10名	345.5	195.0	150.5	377.5	231.5	146.0	32.0	36.5	-4.5	10名
2か月～6か月	0名	–	–		–	–		–	–		–
1年	1名	645	420	225	685	440	245	40	20	20	1名
2年	0名	–	–		–	–		–	–		–
3年	3名	356.7	200.0	156.7	370.0	218.3	151.7	13.3	18.3	-5.0	1名
3年以上	2名	292.5	200.0	92.5	360.0	217.5	142.5	67.5	17.5	50.5	0名

海外経験のある方が，ない者に比べて高いスコアを示し，リスニングセクションにおけるスコアが高いなどの一般的な傾向はあるが，長期にわたる海外生活体験のある者の数が十分ではなく，海外生活の期間・時期とスコアの関係などについては，明確な結論は導き出すことはできなかった[13]。つまり，(1e)の仮説は立証することができなかった。2週間から1か月の比較的短期間の生活体験を送った者の体験時期を調べてみると，35名中24名までが15才から18才にかけてであった。高等学校における留学プログラムに参加したという学生が多くを占めると思われる。

3.2　学生の自己能力評価

学生は自己の英語コミュニケーション能力の変化をどのように把握しているのであろうか。2月IPテスト実施時のアンケート調査で，「大学に入ってから1年間で英語の実力は伸びたと思いますか」と聞いた。結果を表14に示す。

表14　スコアの伸びと学生の自己評価の関係（関連スコアを網掛けで、全体平均よりも高いものを太字で示す）

「大学に入ってから1年間で英語の実力は伸びたと思いますか」に対する回答		リーディングが伸びた		リスニングが伸びた		リーディングとリスニングがともに伸びた	
人数		15名		36名		5名	
2月IPテストスコア（トータル）	リスニング	292.7	161.0	290.1	157.4	379.0	228.0
	リーディング		131.7		132.8		151.0
4月IPテストスコア（トータル）	リスニング	321.7	197.3	330.3	197.5	433.0	264.0
	リーディング		124.3		132.8		169.0
スコアの伸び	リスニング	29.0	**36.3**	40.2	**40.1**	54.0	**36.0**
	リーディング		-7.4		0		**18.0**

伸びていない		分からない		(全体平均)	
172名		147名		375名	
266.6	148.6	281.3	154.8	277.2	153.4
	118.0		126.5		123.7
308.4	184.9	330.3	185.0	312.9	187.7
	123.5		124.5		125.2
41.8	**36.3**	28.2	30.2	35.7	34.3
	5.5		-2.0		1.5

表14を検討すると，学生の自己評価と実際のスコアの伸びは一致していないことが分かる。「リーディングが伸びた」と回答しても実際には下がっているし，「伸びていない」と答えても，全体平均よりも大きな伸び示している。このアンケートは，自己を過小評価する日本人学生の傾向を反映したものであると言えるかもしれない。学生指導の際には，実際にスコアの伸びを示しながら，努力を評価するという教員側の姿勢が重要であると言えるだろう。

3.3　文化創造学部の英語教育システムに対する学生の評価

TOEICスコアを利用した文化創造学部の英語教育システムは，学生にどのように受け入れられ，TOEICはどのように受け入れられているのだろうか。この節では，2月IPテスト実施時のアンケートの３項目について分析したい。

１年生で必修であった「TOEICトレーニングⅠ」「リスニングⅠ」「英文多読・速読」の３つの授業について，授業内容が自分の到達度にあっていたかどうかを尋ねたところ，授業によって若干の差はあったものの，2/3強の学生が「合っていた」と回答している。これは，先ほども見た自己の能力を過小評価していることが原因で，1/3の学生が「合っていなかった」と回答することになったとも考えられるが，到達度別クラスを採用しなかった場合は，これほど「合っていた」という回答が寄せられることがなかったであろう。また，授業担当者との個人面談によると，同じレベルの学生が集まっているために，どのレベルの学生に焦点を当てて授業を行えばよいかを悩むこともなく，授業運営がしやすいという意見が多く寄せられ，授業運営の面からも効果を上げている。

また，「TOEICを大学で受験できることをどう思うか」という質問に対しては，96.5%もの学生が「よいと思う」と答え，79.3%の学生が，「これからも機会があればTOEICをぜひ受験したい」と答えている。

「TOEICは大学１年生には難しい」という意見があるのは事実だ[14]。文化創造学部の学生は，ほとんどが卒業後に一般企業に就職することが予測される。就職にも広く採用されているTOEICの存在を１年生のうちに意識させ，自分の実力を学生に知ってもらうことも重要であると考え，文化創造学部では１年生にTOEICを受験させることにした。また，自分の実力を伸ばし，英語をセールスポイントにして将来を拓きたいという学生には，早い時点で自分の英語の実力を正確に把握し，将来に向けての明確な努力目標を設定する必要がある。そのためにも，TOEICのスコアを利用するのが，最善の策であると考えたのである。その意図が，学生の間にも伝わっているのが感じられる。

3.4　愛知淑徳大学全体の英語カリキュラムと今後の課題

注３でも述べたように，愛知淑徳大学では，学内共通の最上位クラスとして全学年を対象に2001年４月から「上級英語セミナー」を開講している。文化創造学部がある星ヶ丘キャンパスでは，2001年前期に13名が受講した[15]。このうち10名が2001年７月にもTOEIC IPテストを受験した。その結果をまとめたのが表15である。

表15「上級英語セミナー」受講者のTOEICスコアの推移（10名分）

	2000年4月 IPテスト	2000年2月 IPテスト	2000年7月 IPテスト	スコアの伸び (2000年4月～2000年7月)
トータルスコア	371.0	481.0	491.0	120.0
リスニング	218.5	280.0	274.0	55.5
リーディング	152.5	201.0	217.0	64.5

3か月ほどの授業の影響が，すぐに英語コミュニケーション能力に反映されるとは考えにくく，トータルスコアの伸びも10点ほどにとどまっているが，注意すべきことは，2000年4月の時点との比較においては，120点もアップしているということである[16]。この10名のなかでは，230点のスコアアップが最高であった。その様子を示したのが，下の表である。

表16「上級英語セミナー」受講者A（2年生）のTOEICスコアの推移

	2000年4月 IPテスト	2000年2月 IPテスト	2000年7月 IPテスト	スコアの伸び (2000年4月～2000年7月)
トータルスコア	300	470	530	230
リスニング	180	285	270	90
リーディング	120	185	260	140

この学生は，筆者との面談において「何も特別の英語の勉強をしたわけではない。ただ，授業で言われたことをやっていただけだ」と語っている。表15と16から言えるのは，「上級英語セミナー」のような授業を受講しようという意識を持っている学生の伸びが大きいということ，そして，教員側が，学生の意欲に応えるために学習の機会を提供して，学生に課題を与えて学習習慣を付けさせることが重要だということである。具体的な指針や方法論を示したり，学生の学習相談に乗ったりすることも忘れてはいけない。

4. まとめ

この論文では，これまで英語能力と関係すると直感的に思われていた様々な因子について，その真偽をTOEIC IPテストのデータによって検証した。(1a-g)にあげた7つの仮定のうち，ここでは，(2a-c)の3つの調査をもとに，(1a-f)の6つの仮定を検証し，(1a-d)について，正しいことを証明した。ここで，(1a-d)を再掲しておこう。

(1)　a. 英語コミュニケーション能力は英語学習時間に依存する。

b. 英語が好きだという学習者は，高い英語コミュニケーション能力を示す。

c. 中学校・高等学校で好きな英語教師がいたことが，英語コミュニケーション能力に影響を与える。

d. 明確な進路目標を持っている，特に将来英語を使った職に就きたいと考えて

いる学生は，高い英語コミュニケーション能力を示す。

文化創造学部におけるTOEIC IPテストの導入は，「TOEICトレーニングⅠ」をはじめとする英語科目の到達度別クラス編成における基礎資料として，大変有効であった。また，4月入学時スコアから翌年2月時のスコアの変化を把握することによって，文化創造学部における英語教育の成果を評価・検討し，TOEICを指標とした英語教育の改善を，今後継続的にはかることが可能となった。今後の英語教育と学生指導にとって有益な説得力のある調査結果が得られた。

表i 4月IPテスト実施時のアンケート項目1（解答用紙の属性欄を利用）

属性欄	質問	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
属性Ⅰ	入学した専攻（表現・多元・環境）と同じ専攻を何度受験しましたか。	（使用しない）	1回のみ	2回	3回	4回	5回	6回	7回	8回	9回
属性Ⅱ	観光を目的としない海外での生活経験はありますか。また、その期間はどれくらいですか。（ホームステイを含む）複数回の経験がある人は最も長期のものについて答えてください。	ない	2週間	1か月	2か月	3か月	6か月	1年	2年	3年	3年以上
属性Ⅲ	属性「の海外生活体験を始めたのは何歳のときでしたか。	属性Ⅱが「ない」の場合	6歳以下	7，8歳	9，10歳	11，12歳	13，14歳	15，16歳	17歳	18歳	19歳以上
属性Ⅳ	また、その行き先はどこですか。	属性Ⅱが「ない」の場合	北米（アメリカ・カナダ）	ヨーロッパ（イギリス・アイルランド等）	オセアニア（ニュージーランド・オーストラリア）	左記3つの選択肢以外の英語圏	朝鮮・韓国	中国語圏	ロシア語圏	スペイン語圏	その他
属性Ⅴ	現在の1週間の英語学習時間はどれぐらいですか。	全くない	1時間以内	2時間以内	3時間以内	4時間以内	5時間以内	6時間以内	7時間以内	8時間以内	8時間以上
属性Ⅵ	現在の1週間の読書時間（日本語）はどれぐらいですか。	全くない	1時間以内	2時間以内	3時間以内	4時間以内	5時間以内	6時間以内	7時間以内	8時間以内	8時間以上

表ii　4月IPテスト実施時のアンケート項目2（解答用紙の所属コード欄を利用）

所属コード欄左から順に記入	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
英語が好きですか。	好き	どちらでもない	嫌い							
中学・高校時代に好きな英語の先生がいましたか。	いた	いなかった								
具体的な大学卒業後の進路の目標がありますか	進路目標があり，英語を使った職に就きたい。	進路目標があるが，必ずしも英語を使う職ではない。	具体的進路目標がない。							
中学・高校以外で英会話の勉強をしたことがありますか。ある場合はその時期はいつですか。（いちばん早い時期のもの）	ない	6歳以下	7，8歳	9，10歳	11，12歳	13，14歳	15，16歳	17歳	18歳	19歳以上

表iii　2月IPテスト実施時のアンケート項目1（解答用紙の属性コード欄を利用）

属性欄	質問	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
属性Ⅰ	大学に入ってから1年間で英語の実力は伸びたと思いますか。	リーディングが伸びた	リスニングが伸びた	リーディングとリスニングがともに伸びた	伸びていない	分からない					
属性Ⅱ	TOEICトレーニングⅠ（1年前期）の授業は自分の実力にあっていましたか。	合っていた	合っていなかった								
属性Ⅲ	リスニングⅠ（1年前期）の授業は自分の実力にあっていましたか。	合っていた	合っていなかった								
属性Ⅳ	英文多読・速読（1年後期）の授業は自分の実力にあっていましたか。	合っていた	合っていなかった								
属性Ⅴ	現在の1週間の英語学習時間はどれぐらいですか。	全くない	1時間以内	2時間以内	3時間以内	4時間以内	5時間以内	6時間以内	7時間以内	8時間以内	8時間以上
属性Ⅵ	現在の1週間の読書時間（日本語）はどれぐらいですか。	全くない	1時間以内	2時間以内	3時間以内	4時間以内	5時間以内	6時間以内	7時間以内	8時間以内	8時間以上

表iv　2月IPテスト実施時のアンケート項目2（解答用紙の所属コード欄を利用）

所属コード欄左から順に記入	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
大学でTOEICを受験できることについてどう思いますか。	よいことだと思う	よいことだと思わない								
これからも機会があればTOEICを受験しようと思いますか。	ぜひ受けたい	受けたくない								
具体的な大学卒業後の進路目標ができましたか。	進路目標があり，英進路目標があり、英語を使った職に就きたい。	進路目標はあるが、必ずしも英語を使う職業ではない。	具体的進路目標がない。							
どのような英語の授業に一番関心がありますか。	英会話	ライティング	リスニング	リーディング	TOEIC対策	その他				

表v 英語科目担当者への授業内容依頼書

『リスニングⅠ・Ⅱ』『英文多読・速読』『TOEICトレーニングⅠ・Ⅱ・Ⅲ』の共通目標が出来上がりましたので，TOEICトレーニングのレベル別の想定スコア・目標スコアと共にお送りいたします。授業概要をお書きになる際，そしてテキストをお選びになる際の参考になさってください。

科目名	開講期	目標	専攻・クラス		想定TOEICスコア（4月）	目標TOEICスコア(翌年2月)	学年
リスニング Ⅰ・Ⅱ	1年前期・後期	大量の英語を聴取することを第一目標とする。 会話形式・ナレーション等，様々な形式の英語を聞いて理解する練習をさせる。 聴解を助ける音変化のしくみを学ばせる。 様々なスピードの英語を聞かせ，理解する練習をさせる。 英語のリズムを身につけさせ，話し手の感情や意図を理解させる。 可能な限りLL教室を使用する。 音読も訓練する。 ＊初級クラスでは，ごく簡単な内容のものから初め，英語を聞くことに対する恐怖感を取り除く。	表現文化専攻 環境文化専攻	上級	300－450	400－550	1年生
				中級	230－300	330－400	
				初級	110－230	210－330	
英文多読・速読	1年前期	できるだけ多くの文章を読ませる。 文章をできるだけ速いスピードで読ませ，大意をつかませる。 新聞・雑誌の記事，評論，文学作品等，様々な分野の英文を読ませる。 ボキャブラリーを増やす練習をする。 学生のレベルに応じて題材や使用語彙の難易度を適切に選ぶ。 辞書を引き，文脈に応じた用法・用例を調べる習慣を身につけさせる。 英文におけるパラグラフの構成，論理の流れを理解させる。 音読も訓練する。 ＊初級クラスでは，特に辞書の引き方と，語彙力を身につけさせることに重点を置き，易しめの文章を沢山読ませる。 ＊上級クラスでは，より早いスピードで読ませ大意を把握させること，そして難易度の高い文章を読むことにも挑戦させる。	多元文化専攻	上級	300－600	400－700	
				中級	250－300	350－400	
TOEIC トレーニングⅠ	1年後期	下記を目標として，TOEIC 全般の手ほどきを行う。【全般】 （1）TOEIC 全般の問題形式になれること （2）英語の基礎力をつけること （3）英語学習の習慣形成		初級	140－250	250－350	
TOEIC トレーニングⅡ	2年前期	TOEIC Part 2 : READING の強化を行う。【リーディング，文法】 （1）TOEIC Part 2 : READING の問題形式を熟知すること （2）英語の読解力増進 （3）英語の文法知識増進 （4）英語語彙力増進	表現文化専攻 環境文化専攻	上級	400－550	450－600	2年生
				中級	330－400	380－450	
				初級	210－330	260－380	
TOEIC トレーニングⅢ	2年後期	TOEIC Part 1 : LISTENING の強化を行う。【リスニング】 （1） TOEIC Part 1 : LISTENING の問題形式を熟知すること （2）英語の聴解力増進 （3）一般常識の増進 （4）想像力・類推能力の増進	多元文化専攻	上級	400－700	450－750	
				中級	350－400	400－450	
英会話Ⅰ	2年前期	できるだけ学生に発言の機会を持たせる。		初級	250－350	300－400	
英会話Ⅱ	2年後期						
ライティング Ⅰ・Ⅱ	1年前期・後期	コンピュータを使ったライティング指導を行う。 （この授業の目標の詳細は、この文書の英語版に記載されています）	（能力別クラス編成は行わない）				

＊１年間に２回のTOEIC IPテストの監督・実施は，文化創造学部の専任教員全員の協力によって成り立っている。文化創造学部におけるTOEIC導入と実施に際しては，TOEIC運営委員会の関係者各位，特に城田賢吾氏にさまざまな御協力をいただいた。株式会社国際コミュニケーションズ・スクールの高橋達郎氏，新島俊英氏，TOEIC運営委員会の澤田和加氏にも，有益なコメントをいただいた。参考文献等に関する情報は，細井正先生（愛知県立岡崎北高等学校），古井雅子先生（愛知県立中村高等学校）からいただいた。ここに記して，お礼申し上げる。

注

1　愛知淑徳短期大学は1961年に開学した。文化創造学部に改組される前には生活科学科，文芸学科，英米語学科，コミュニケーション学科の４学科が設置されていた。文化創造学部は文化創造学科のもと３つの専攻（表現文化専攻，多元文化専攻，環境文化専攻）が設置されている。愛知淑徳大学は，1975年に開学し，現在は文学部，現代社会学部，コミュニケーション学部，文化創造学部の４学部がある。

2　文化創造学部「設置の趣旨」より。

3　表１における「リスニングⅡ」と「時事英語」は英語運用能力の養成が特に必要とされる多元文化専攻では必修となっており，他の２専攻では選択となっている。この表には含まれてない英語運用能力の養成を目的とする授業には，多元文化専攻中心科目の「英語表現法Ⅰ（通訳１）」「英語表現法Ⅱ（通訳２）」「英語表現法Ⅲ（プレゼンテーション）」，全学共通の最上位レベル科目として2001年４月より開設された「上級英語セミナー」がある。

4　1989年度より，コミュニケーション能力の養成を目指し，高等学校でも「オーラルコミュニケーション」（以下OC）が導入されたが，授業の進行は担当教員に任されており，一般的には，十分な指導が行われていないことは否めない。「全国公立高校進学校アンケート集計結果」（『英語教育』2000年１月別冊）によると，「２単位確保して２単位ともOCの授業をしている」という学校は全体の16%で，51%の学校は「２単位確保して，1単位は文法，1単位をOCに充てている」と回答している（1999年６月から８月にかけて94校を対象に調査。回収率は80%）．また，「２単位を確保して，2単位とも文法や演習，英。の増単に充てている」という学校も24%にのぼる。OCの実態については，濱中啓子氏によって1995年に行われた調査「オーラルコミュニケーションに関するアンケート」（http:// www.wellmet. or.jp/~k-ko/ocquestion.html）や，大阪高等学校英語教育研究会オーラルコミュニケーション研究部会によって1996年に大阪府下75校986名の高校生および教師を対象に行われたアンケート調査（http://www.asahi-net.or.jp/~AT3T-HNN/gaiyo.htm）が参考になる。

5　１年生全員に対して，2月に行ったアンケート調査（有効回答数367）では，67.8%が「英会話の授業に一番関心がある」と答えている。１年生向けには英会話の授業が開講されていないことによる反動とも考えられるにしても，非常に多くの学生が英会話に関心があることが分かる。

6　入学試験の実施回数などは，2001年度入試のもの。

7　以下，到達度別クラスと呼ぶことにする。

8　TOEIC (Test of English for International Communication)は英語コミュニケーション能力を測定するための客観テストである．言語学・統計学・心理学の手法を駆使していて作成されており，スピーキングおよびライティング能力の相関性を求め，総合的な英語力を客観的に正確に判定する。評価スケールはテスト問題が変わっても不変であるというのが特徴である。リスニング部門（45分, 100問）とリーディング部門（75分, 100問）各495点，合計990点が理論上の最高点で，総合スコアの±25以内は誤差の範囲とされている。TOEICはこれを開発した米国のEducational Testing Service (ETS)の登録商

標であり，TOEICプログラムはETSの子会社であるThe Chauncey Group International Ltd.により管理・運営されている。日本におけるTOEICテストの実施・運営は財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会TOEIC運営委員会が行っている。TOEICについての情報は，http://www.toeic.or.jpから入手できる。

9　IPテストと公開テストのトータルスコアの平均点を比較すれば，公開テスト562点に対して，IPテスト449点となっている（2000年4月から2001年3月にかけて行われた公開テスト受験者440,318人，IPテスト受験者577,754人の平均）。学校や企業によって強制的に受けさせられるIPテストの方が，自発的に受ける公開テストよりも113点も低くなっている。このスコア差は，英語学習者と実務者との英語力の差ともいえるほど大きなものになっている．また，IPテスト受験者の年齢層は，20～34才が最も多く，これだけで全受験者の66%となっている。文化創造学部のIPテストの受験者層である20才未満は，IPテスト受験者全体（2000年4月から2001年3月にかけて行われたIPテスト受験者577,754人のうち，TOEIC運営委員会の設定したアンケートに回答のあった493,184人）のうち12.1%しかなく，ただ単純に，IPスコアの全国平均値と，文化創造学部のIPスコアの平均値を比較するのは，無意味である。

10　2001年度実績。2000年度は，入学式の翌日に実施。

11　ラピッドスコアリングサービス，磁気媒体作成ともに有料。

12　通常，IPテストでは，スコアが打ち出された紙片が返却されるだけである。文化創造学部では，学生のモティベーションを高めるためにも，学長と学部長の署名入りのスコアシート（有料）を配布することによって，学生にスコア通知をしている。

13　英語圏での生活体験のみを抽出した結果が次の表である。

海外生活体験の期間	人数	4月IPテストスコア（トータル）	リスニング	2月IPテストスコア（トータル）	リスニング	スコアの伸び（トータル）	リスニング	うち英語圏での生活体験者数
			リーディング		リーディング		リーディング	
2週間	32名	302.2	172.3	353.6	210.6	51.4	38.3	13,14歳7名 15,16歳13名 17歳10名など
			129.8		143.0		13.2	
1か月	10名	345.5	195.0	377.5	231.5	32.0	36.5	13,14歳2名 15,16歳5名 17歳2名など
			150.5		146.0		-4.5	
1年	1名	645	420.0	685	440.0	40	20.0	15,16歳
			225.0		245.0		20.0	
3年	1名	440	220.0	440	250.0	0	20.0	6歳以下
			220.0		190.0		-30.0	

TOEIC運営委員会(2001a)でも，海外経験が英語能力に大きな影響を及ぼすことは想像できるが，具体的にどのような影響があるかということについての実体はなかなかつかめないと述べられている。ここでは，膨大なデータをもとに，英語使用実務・海外経験と英語能力についてデータ分析を行い，海外経験者のほとんどの平均スコアは実務レベル（600点以上）に達していることを示している。言い換えれば，海外経験は実務レベルの決定要因になっているということである。これに対して，英語使用実務は実務レベルの決定要因にはほとんどなっていないことも明らかにされている。そして，海外生活体験の平均スコアが実務レベルに達しているといっても，すべての海外経験者の英語力が実務レベルに達しているというわけではないことから，歩留まりを考慮し，「英語能力を実務レベルにまで引き上げ

るためには，少なくとも通算6か月以上の海外経験が必要である」と結論づけている。

14 TOEIC 450点以下の受験者層を対象に，TOEIC Bridgeというテストが開発され，2001年11月から実施されることになった。

15 「上級英語セミナー」は週に2コマの授業が1セットとなった授業である。プロの通訳者による通訳演習や，ネイティブの教員との英語による時事問題考察，フリーディスカッション，ゲストスピーカーによるトークなど，英語学習を通じて視野を広げる内容の授業となっており，十数人の少人数で運営されている。半期完結だが，前期・後期とも開講されており，繰り返しての受講が可能である。選抜はTOEICスコアに基づいて行う。文化創造学部以外の文学部，現代社会学部，コミュニケーション学部のある長久手キャンパスでは，1年生から4年生までが受講している。ただし，両キャンパスとも，前期のみ，1年生の受講は認めていない。

16 4月IPテストと2月IPテストのトータルスコアを比較して，アップ高が大きかった3人は以下の通り：220点（335→555），200点（240→440），200点（315→515）。この中の1名も「上級英語セミナー」の受講生である。

参考文献

千田潤一 (1995)『使える英語をモノにする本』 国際コミュニケーションズ.

竹蓋幸生 (1984)『ヒアリングの行動科学：実践的指導と評価への道標』 研究社出版.

竹蓋幸生 (1999)「コミュニケーション能力養成の英語教育はできる(1)-(12)」,『LL通信』 203-212. ソニーマーケティング株式会社.

TOEIC運営委員会 (2001a)『活用実態報告』 財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC運営委員会.

TOEIC運営委員会 (2001b) 『TOEIC Newsletter』 75, 財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC運営委員会.

参考資料

「全国公立高校進学校アンケート結果」『英語教育』2000年1月別冊, 11-12, 大修館書店.